

女子大学生スポーツ選手の試合用ユニフォームへの関心

スポーツマネジメントゼミナール 1313022 小野澤 怜子

1. 研究動機・研究目的

今年開催されたリオオリンピック、パラリンピックをはじめスポーツは魅せる時代となりスポーツウエアのファッション化が進み、消費者がかっこいい選手のユニフォームに憧れを抱き、簡単に同じユニフォームを着られる時代となった。しかし、学生競技では同じユニフォームを着ていることが多く、特に野球、体操、サッカーバスケットボールなどといったチーム競技にその傾向があると言われ、ある地方の国立大学のバスケットボール部のユニフォームは創立以来スタイルチェンジがされていないと言われている。

田村(2003)は、スポーツウエアには運動機能性以外にお気に入りのウエアを着ていたので落ち着くことができたといった精神機能性もあると述べている。また田村(2003)の研究では、対象をバスケットボールにし、そこでは成績上位群、下位群共にファッションナブルなユニフォームへの憧れがあり、派手なファッションが強さ、威圧感を対戦相手に与え競技的戦力としてこうがあると推測した。そこで他の球技スポーツ、チームスポーツでも試合用ユニフォームは派手なユニフォームが好まれるのだろうか。

そこで本研究は女子大学生のバレーボール、ハンドボール、サッカー選手を対象にユニフォームに関する意識について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1. 調査対象: J 大学スポーツ健康科学部の女子バレーボール部、女子ハンドボール部、女子蹴球部
2. 調査方法: アンケート調査
3. 調査項目: 1) 調査対象者の個人的属性
2) 調査対象者の月経に関する項目
3) 調査対象者の色彩に関する項目
4) 試合用ユニフォームに関する調査項目

3. 主な結果と考察

1) 個人的属性について

競技年数を分析したところ、12 年が特に多く 1 年未満は 1 人しかいなかった。この競技継続年数を 3 つのグループに分類すると、1 年～9 年を平均以下、10 年～12 年を平均、13 年～17 年を平均以上となった。

2) 調査対象者の月経について

使用している生理用品では、全体の 9 割がナプキンを使用し、その中の 2 割がタンポンとの両方使いをしていることが明らかになった。また、試合中に月経によってパフォーマンスが下がる経験をしたという結果では、約 6 割があると答えた。そしてこの時の心境に影響することは、約 3 割が精神的、身体的影響があると分かった。

3) 調査対象者の色彩について

色彩については、気分が上がる色はどれかという質問項目で、赤、青、緑、黒、紫、オレンジで調査し、最も人気が高かったのが赤でその次に青、黄色、緑という結果となり、J大学の大学カラーである紫は全体の約3割であった。

4) 試合用ユニフォームについて

本研究での因子は6の因子を使用し、そこから因子分析を行ない、(1)高揚感、(2)派手、(3)外見、(4)内部的影響、(5)一体感、(6)威圧感の6因子を抽出した。これを競技種目別、競技年数別で平均値の分析を行なったところ、まず3競技での6因子のグループ平均では「高揚感」が最も高く、「一体感」が最も低かった。またハンドボール部と蹴球部それぞれの因子に高い平均値を表していることが分かった。しかしバレーボール部はどれにも高い平均値が表れなく、それは試合用ユニフォームに対して関心が低いと推測された。

競技年数別でも、グループ平均を分析すると「高揚感」が最も高く、「一体感」が最も低い数値であった。また、年数が10年未満のグループでは「内部的影響」、「威圧感」、年数が平均のグループでは「高揚感」、「派手」「外見」とそれぞれが高い数値を表していた。

4. 結論

本研究の対象者の競技年数の平均は10~12年であり、月経に関する結果では主に使用している生理用品はナプキンであり、タンポンなどを使用している対象者は少なかった。また、月経によって気分、パフォーマンスが下がる経験をした学生は全体の6割であることが分かり、その影響は精神的、身体的にあり、この影響を少しでも緩和できる方法が必要であると推測する。

種目別、年数別の平均値が高かったのは、「高揚感」、「外見」であることが分かり、これはどの種目も自分たちの試合用ユニフォームに満足し、ユニフォームを変えたいや、ルール改正を求めている学生選手は少ない。そしてやる気が起きると感じ、試合用ユニフォームに対して関心が高い学生選手が多いと考えられた。

また競技年数が長いことから試合用ユニフォームに愛着を持つことができ、必然的に気合を入れることができ、派手なユニフォームに対して関心が高くなるということも明らかになった。

本研究の対象者を少ない人数、少ない種目数で行なったため良い結果を出すことができなかった。そのためこれを踏まえ次は、男女比、種目数、人数を増やすなどあらゆる方向から研究していくことにより、さらにユニフォームと選手の関係性について興味深い結果が生まれるのではないかと考えられた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり多大なるご指導とご指摘をいただきました指導教官の小笠原悦子教授に深く感謝いたします。

また、アンケート調査に快くご協力してくださったJ大学所属の学生の皆様にこの場を借り感謝申し上げます。